令和4年度　小平市立小平第三中学校　学校評価報告書

学校教育目標

目指す学校像（ビジョン）

【目指す学校像】　自らの能力を高め活用し、これからの社会に貢献できる人材を輩出する学校
【目指す児童・生徒像】　進んで学び思いやりのある、心身ともに健康な子ども
【目指す教師像】　教育公務員としての使命と自覚をもち、意欲的に業務に携わることのできる教師

前年度までの学校経営上の成果と課題

	具体的方策	第1回評価 取組指標	第1回評価 成果指標	成果・課題・対策	第2回評価 取組指標	第2回評価 成果指標	学校関係者評価	成果・課題・次年度以降の対策
健全育成	生徒専門委員会を支援し、生徒の主体的な取り組みを大切にしながら落ち着いた学習環境と生活環境を整備する。	3	3	・前年度からの取り組みを確実に引き継がせることが課題である。 ・学校生活の基本的な生活習慣をしっかり身につけさせ、生徒の主体的な活動を支援する。	3	3	「生徒会主催の落ち葉拾い」や「体育委員会主催のドッジボール大会」等生徒の自主性を生かした取り組みは、素晴らしいと思う。三中の伝統的なものにしてほしい。SNSのトラブルは、学校だけでは、解決できない。保護者や社会全体で考えて行く必要があると思う。	生徒達なりにやるべきことを考え主体的に行動できた。生徒会役員を中心に様々な企画を考えて意欲的に取り組み成果をあげた。教育活動アンケートで「楽しく学校に通えている」と肯定的に回答した生徒は前年度比-3ポイントの85％であった。
	・アンケートを実施・活用し生徒の状況把握し、複層的な視点で生徒の心情を把握する。	4	3	・各関係機関と連携が図られており、指導を行っている。いじめの認知に関する学年間での差は、なくなった。 ・SNS内でのトラブルが多くなってきており、情報モラル教育を充実させているが中々改善に至っていな。	4	3		・「いじめ報告シート」を作成し、認知に関する学年間での差をなくした。 ・SNSでのトラブルが多くなり、全容をつかむまで時間がかかった。 ・いじめは、犯罪であるという認識をしっかりと生徒にもたせるよう指導がひとうようである。
学力向上	「英語」で指導方法改善授業を実施、1年生の数学ではティームティーチングも実施し学力の底上げを図る。	4		個別に支援の必要な生徒に対してきめ細かな支援が必要。学習に苦手意識をもつ生徒に対して個別な対応を考えることが課題である。個々のニーズを把握する必要がある。成果資料の収集はできなかった。	4		タブレット端末を活用した授業が展開されていて、子どもたちの興味・関心を引くものであった。視力に影響しないかが心配である。英語は、少人数できめ細やかな指導ができていると感じた。発表も感染対策が取れていてとてもよかった。	1年生数学 ティームティーチングは個別に支援の必要な生徒に対してきめ細かな対応ができ、成果があがった。 次年度も継続したい。英語科の少人数では、ALTと連携してスピーキング力をつけさせている。
	校内研修会でタブレット端末の活用授業について学期1回実施しするとともに一人1回以上端末活用授業を公開する。	4		・校内研修会で研究部の教員から幾つも実践事例が示され、それを基に授業が実施できた。 ・活用については、個別最適化の学ぶから協同的な学びに結びつけるようにする必要がある。	4			効率よく教え込む授業スタイルが主となった。授業では「ねらい」や「めあて」を理解させることが定着したが「授業の流れ」の提示や「振り返り」の活動の改善が課題である。タブレット端末を活用が進んだが個別最適化の学び、協同的な学びに対する更なる推進が必要である。
特別支援教育	スクールカウンセラーの配置やスクールソーシャルワーカーを活用した外部機関との連携や訪問活動により相談体制を充実させる。	4	4	校内委員会を毎週定期的に開催し、生徒の状況と対応について情報交換を行った。様々なニーズに応えることが課題である。具体的な支援方法についての検討を進める。	4	4	8組や上水学級の生徒も個別の課題をしっかりと行っており、感心した。8組は、通常の学級より転学が数名あり、生徒の状況にあわせた校内委員会の活用が進んでいると感じた。8組の教員による業障がい者理解教育のため啓発授業はとても良いものである。	保護者教育活動アンケートで、肯定的回答は前年度から＋11ポイントの79％であった。校内委員会では巡回相談の心理士から様々な知見や個別の対応策について助言を受けることができた。教員の共通理解と実践を進めたい。
	障がい者理解授業や交流及び共同学習を実施する。	4		・1部の生徒しか交流及び共同学習は実施できていない現状があるので全生徒ができるよう計画を立てる。障がい者理解授業は2学期末に1年生、3学期3年生で実施する計画を立案する。	4	3		障がい者理解授業は2学期末から3学期始め実施した。教員の教育活動アンケートでの肯定的回答は後期が前期比＋4％と向上した。保護者教育活動アンケートでは肯定的回答は全年度から＋13ポイントの63％であった。「わからない」との回答が前年度から－27ポイントの13％と大きく改善された。今後も学校の取り組みをPRする機会を多くしていく。
働き方改革 業務改善・	教員一人一人が時間を意識した働き方を実践する。			部活動指導が超過勤務の主な原因である。複数顧問を配置するなど部活動の在り方を考える必要がある。	3	4	部活動の負担軽減については、複数顧問や外部指導員の活用が進んでいると思う。今後の課題として、地域部活動の移行は、財政面の支援が不可欠であると考える。学校閉庁日等で教員が休みやすい環境をつくっているのは、良いと思う。	週あたりの在校時間は年間平均で職員全体の90％が60時間以内であった。初任者や分掌主任等の特定の教員の勤務時間の超過の解消が課題である。 平均年休取得日数は15日以上となった。 業務の効率化や分担を一層進める必要がある。
	年次有給休暇の取得目標を明示し積極的な休暇取得を促す。			長期休業日に多くの有給休暇を取得できるよう、計画的に業務を行うよう改善していく。	2	2		特に年度初めの部活動の大会時に土日勤務が多くなる。土日の引率が偏りがないよう顧問間で調整するよう改善を図る。